

# ハンサムクイン

作. 勇氣 雪



## 登場人物紹介

葵……八重の娘で会津の王女。でも八重の妹のきらりのせいで母親を亡くすが康紘のおかげで自分が女王だと目覚める。

摂……葵の幼馴染。美男子になって葵と結婚する。

八重……葵の母親で会津の女王。皆に慕われているが、きらりのせいで亡き者になる。

ジョー……会津の王。女王の八重と娘の葵を大事にする。

きらり……八重の妹で葵の叔母。邪悪で葵と八重を亡き者にして女王の座を狙う。

ケムゾウ……きらりの手下で葵を襲う。

ニヤンチャン……八重とジョーの飼い猫執事。二人を尊敬している。

康紘……まじない師で葵を女王だと目覚めさせる。八重と仲よし。

井田……青木のパートナー。葵と友情関係を持つ。

青木……井田のパートナー。会津のために葵たちと協力する。

ここは会津。女王の八重と王のジョーの間に娘が生まれた。次のハンサムクイーンだ。会津の城には老若男女問わずたくさんの方が集まり、「王女様、ばんざい。ハンサムクイーンばんざい。」とみんなでハンサムクイーンの誕生を祝った。

その祝いの中で飼いだ猫執事ニャンチャンがおめでとうございます。

八重様、ジョー様。こんなにたくさんの方たちがお祝いにかけてくれました。」

「みんな、ありがとう。」

「しかし・・・。」

八重の妹きらりが来ていないのを見てニャンチャンはそうつぶやいた。

「もついいわ。ニャンチャンもありがとう。」

と言いながら八重がニャンチャンの頭を撫でていると、

「八重さん。」

と現れたのが友人のまじない師の康紘だ。

「康紘さん、わざわざありがとう。」

「ところで、娘さんは？」

「ジョーに抱かれているわ。」

「娘はここですよ。」

と背後から声がしたので康紘が振り向くと、ジョーが小さな娘を抱いていた。

その娘は「葵」と名付けられたという。

「おー、かわいいお嬢さんだ。」

康紘はそう言って葵の首の周りに女王の印をつけ、町人にお披露目をした。

その様子をこっそり見ていた八重の妹のきらりは、葵が生まれたため、次の女王になれないことが面白くないらしく、その場を去っていった。

それから10年がすぎた。葵は赤ん坊から幼い娘に育っていった。

そんなある日、母親の八重と一緒に城の外を眺めていた。

「葵、見てごらん。ここが会津だよ。」

「うわー。」

「いつかは私の時代が終わり、次の女王にお前がなって会津を守るのだよ。」

「わかったわ、ママ。」

そんな会話をしながら二人は会津の景色を眺めていたが、そのなかに、ポツンと暗い場所が見えた。

そこは、会津の端の方にある場所で、

「行ってはいけない。」

と八重は葵にビシッと言った。すると、

「八重様、大変です。」

と飼い猫執事ニヤンチャンが会津に敵の忍者がやってきたと忠告したので、

八重は今までの母親の顔から会津を守る女王の顔に変わった。

「ニヤンチャン、葵を頼むわね。」

「ママ、ボクも連れてって。」

と葵がねだると

「ダメよ。」

八重はさっそく、敵の忍者と戦いに向かった。

「ちえ、いつも自分ばかり。」

と葵は不満そうに呟く。

「葵、そんなに落ち込まなくても。いつか、女王になったら敵と戦わなくてはなりません。」

とニヤンチャンは葵をなだめた。

その後、葵は八重の妹で叔母のきらりの家に行った。

「きらりおばさん、何があったか当ててみて。」

「私はなぞなぞ遊びなんかキライよ。」

ときらりはつまらなそうに答えた。

「ボクはね、大きくなったら女王様になるんだよ。そしてね、今日はね、ママが会津の全てを見せてくれたんだ。」

「よかったわね、でも今はおなかが痛いんだよ。」

ときらりはふて寝を始めた。

「ねえ、おばさん。ボクが女王様で叔母さんは何になるの?」

「まめけなおばさんよ。」

「変なおばさん。」

と葵は無邪気に答えた。

「あんたは幸せ者ね。そっだ会津の端に行ったことはある?」

「あそこは行っちゃいけないんだって。」

「そのとおりよ、あそこはこわくて勇気のある王女しか行けない。  
と、きらりは挑戦的に言った。

「怖くないよボク。何があるの?」

「いいえ、それは言えないわ。」

ときらりは何かを企む様子で答えた。

「どうして?」

「かわいい姪っ子を心配しているのよ。」

と葵の頭を乱暴そつに撫でるきりり。

でもそれに気づかない葵。

「そっか、たった一人の姪だもんね。」

「そつよ、だからあそこの端には行ってはいけないわよ。」

「約束するよ。」

「よし、いい子ね。約束よ、絶対に行つてはいけないからね。それから、これは二人だけの秘密よ。」

その後葵は、ボーイフレンドの摂の家に向かった。摂が父親と遊んでいるところだったので、

「おいでよ、摂。楽しいところに連れて行ってあげるよ。」

と葵が声をかけると

「葵、今俺遊んでいるんだよ。」

と摂は答えた。

「さあ、葵も私と遊ぼうか?」

と客として来ていた葵の父、ジヨーが遊びに誘った。

「パパ、今は摂と遊びたいの。」

「どこ行くんだよ?つまんないところだったらイヤだよ。」

と摂が言つと、

「もつ、最高だよ。」

とつづつずしなから言つ葵。

「一体、どこなんですか?最高のところって。」

と、ジヨーが尋ねた。

「鶴ヶ城の中だよ。」

「鶴ヶ城の中?あそこのどこが楽しいの?」  
と摂。

「だまって来てよ、わかるから。」

「うん、わかった。ねえ遊びに行つてもいい?」

と摂は父親に尋ねた。

「どうかな?ジヨーさん。」

「わかりました、いつてらっしゃい。そのかわり、ニャンチャンも一緒だからね。」

「えっ、あのニャンチャン。」

と二人だけで行ききたかったのでガツカリする葵と摂。

ニヤンチャンは葵と撰の前を歩きながら、チラリと後ろを向いた。

葵と撰が仲良くしているのを見て、

「いやー、二人は仲良くしている。こんな姿を見たら両親とも、さぞかし喜ぶでしょう。やがて、二人が結婚すれば会津にも幸せが来るとのこと。いやー、めでたい。」

とニヤンチャンが言った。

「冗談でしょ、絶対に嫌だからね。」

と葵と撰は答え、ニヤンチャンがふたりに気を取られている隙に、会津の端に来てしまった。

「ここだよ、会津の端。」と葵が言つと

「なんか面白そう、行ってみようよ。」と撰が答えると

「ダメです、帰りましょう。」とニヤンチャンが止めた。

「帰る？ボクは女王になる女の子なんだよ。なにがあっても笑い飛ばしてやるよ。」と葵。すると敵の忍者ケムゾウが現れた。いかにも葵をいじめようとしていた。

そのときー

八重が葵を守ろうとして必死にケムゾウと戦った。ケムゾウが八重に囲まれてしまった。

そのくらい八重女王は強いのだ。そしてケムゾウは去っていったが、八重が今度はニヤンチャンをにらんだ。

「お前がついていながら何をやっている。」

「葵、お前はママの言うことが聞けないのか？」

「ママ、ごめんなさい。」

「さあ、帰るわよ。」とその様子を見ていたきらりの姿に葵たちは気づいてなかった。

城への帰り道、前を行く八重。後をついていくのが、葵とニヤンチャンと撰。

「ニヤンチャン。」

「はい、何でしょう八重様？」

「私は娘と話さなきゃいけないので、ニヤンチャンと撰で帰りなさい。」

「はいっ！撰、帰りましょう。葵、ガンバって。」と撰と帰るニヤンチャン。

八重の強さに葵はまだ母親にかなわないんだなと思った。

「葵、お前にはガッカリした。」

「ごめんなさい。」

「死ぬところだった。言いつけに背いただけじゃない。撰まで危険な目に合わせた。」

「ママみたいになりたかったんだよ。」

「お前にはわかっていない。葵。向こう見ずと勇氣とは別のもんよ。」

「ママには怖いものなんてないんでしょ？」

「今日はじめて・・・。」

「えっ、こわかったの？」

「ええ、お前を失うかと。」

「へえ、女王様でもこわいときってあるんだね。」「でもさ、知っている?」「なにを?」

「忍者たちの方がもっとこわがっていたんだよ。」

「そうよ、ママをこわがるものなんていない。こっちに来い。」

と葵を抱きしめる八重。

「ママ。」

「なに?」

「ぼくたち友達?」

「そうね。」

「ずっといつまでも一緒だよ?」

「葵、おばあさんが私にしてくれた話よ。あの大空にいつまでも歴代の女王たちがわたしたちを見守っている。」

そのころ、ケムゾウはきらりの手下で、とうとう八重と葵を亡き者にする計画をたてていた。翌日、きらりは葵をいかにも壊れそうなフリ橋の下に連れてきた。周りには誰もいない。

良く晴れていて、不幸なことなんかおきそうにもないほどだ。

「ここよ、ここで待つよ。あんたに見せたいものがあるってママが言っている。」「ときらり。

「へえー、そうなんだ。」

「教えてしまったら先の楽しみがなくなるし、八重にヒミツにしてって言われたの。」「

「大丈夫だよ、びっくりしたフリをするから。」「

「ダメよ、忍者に襲われるかもしれないわ。」「

「あれ、知っていたの?」

「もちろんよ、ママが来てくれて命拾いしたわね。そうだ、女王様になるんだったらもう少し威張った方がいいわよ。」「

「そっなの?ねえおばあさん見せたいものってボクがビックリするよなもの?」

「ビックリするとも、死ぬほどにね。」「

そしてきらりがそっとその場を離れ、橋をおりるとケムゾウに合図をした。

そしてきらりの咳ばらいを合図にケムゾウは橋を壊した。その揺れに気づいた葵は、橋にしっかりしがみついている。その時、八重が川の近くにいた。するときらりが、

「大変よ、八重。急げ葵が流されてしまっ。」「

「葵が。」八重は葵を助けようとして川に入り葵を抱えて何とか助けた。でもきらりは、ニヤンチャンを気絶させて隠れていた。八重自身も橋に掴もうとしたとききらりが現れた。

「きらり、助けて。」と言う八重の手に、きらりは爪を立て見たことないような冷たい目で

「女王様、永遠に幸あれ。」そういうと手を放し、八重は流されてしまった。「ママー。」

そして、葵は気づいてしまった。もう八重と遊ぶことも、八重が話す女王についての話も、楽しかった思い出になってしまったことに。葵が泣いているときらりが

「葵、なにをしたのよ？」

「ママが流されちゃったの。」

「そうね、女王様はあなたのために死んだのよ。あなたの父親はなんていうかしらっ？」

「どうしたらいいの？」と葵が背を向いているとき、きらりは

「さあ、あなたも流されなさい。」と川の方に押した。そしてそれを見届けるとケムゾウと去っていった。

しかし葵はなんとか自力で、川に流されることなく、悲しみの旅に出た。

そしてとうとう我慢できずに倒れてしまった。悲しんでいるところをたまたま男子高校生井田と青木が見つけて葵を助けた。

そして井田の家で楽しく三人で過ごしているうちに、葵の涙が溢れていくのがおさまりいつしか、八重たちと楽しく過ごした時の様な笑顔になった。

それから数年間が過ぎて葵は美しい娘に育っていった。そんなある日、美男子に育った撰が葵の前に来て

「お願い、葵。助けて。」

今会津ではきらりとケムゾウが我が物顔で支配している。

しかも女子全員にオシャレしろという。もちろん、中にはしたくもない女もいるはず。

断るときらりとケムゾウが無理矢理化粧などさせるという。

もうメチャクチャだというのが葵は八重が自分のせいで亡くなったと思い、会津には帰れないという。葵は一人になり大空を見つめた。

「ママ、どうして死んじゃったの？ボクのせいだ、ボクは女王になれないよ。」

と嘆き悲しんでいる葵の肩を誰か叩く。後ろを向くとメガネをかけた男性がいた。

「あなたは誰？」

「私のことはどうでもいい。八重さんの娘さん。」

「どーしてそれを？」

「さて、どうしてかな？それより来てほしい。」

葵はその男性の後を追った。その男性は八重とジョーの娘として葵をお披露目した康紘だ。しかしその時は赤ん坊だったのももちろん葵は覚えてない。

すると康紘は葵の前にある鏡を見ろという。葵が言つとおりになると自分の姿が映っていた。

「これはママじゃない。ボクが写っているんだ。」



すると見ているうちにだんだん鏡の様子が変わってきて八重の姿になった。

「葵」

「ママ」

「葵忘れたの？」

「違う、忘れてはいない。」

「お前を忘れることは私のことも忘れることだ。自分の胸の中を見てみる葵。」

お前はただの女ではない。今生きている世界で役目を果たせ。

お前は私の娘でまことの女王よ。そして私が女王としてなにより誇らしかったのはお前を娘に持ったことだ。」

「それは、昔の話でしょ。」

「いいや今も変わらない。」

「待って、行かないで。」

「私はいつも側にいる。」と言って八重の姿は消えた。

康紘は葵が決意をしたのかを確かめるように聞いてみた。

「さてもう一度聞かず、お前は何者だ？」

「ボクは葵、八重の娘。」と東京から会津へ立ち向かう葵。

その様子を井田と青木と撮に知らせる康紘。一方葵は走っていた、会津へ向かって。

会津についてみたら女王の言いつけに背いた女性たちが泣いていた。そんな様子を見ていた葵は怒りがこみあげてきた。

ちよつと撮も井田も青木も仲間に加わり戦いに出ると言ってくれた。葵は嬉しかった。会津を捨てた自分にも仲間がいるなんて。

いぎ、鶴ヶ城の中へ。

「ボクはきらりを探す、撮は。パパと家来を探して。」

「ジヨ」

と葵の父親を呼ぶきらりを発見した。

「なんですか？きらり。」

「なぜ女たちは全員オシヤレをしない。」

「したくない人もいるんだと思います。」

「ちがう、したがるはずよ。」

「もう自分は自分らしくさせてもいいものかと。」

「許さないわ。あたしは女王よ。やりたいようにやる。」

「あなたなんて八重さんと比べる価値もない。」

「私は八重より何倍も素晴らしい女王よー！」

とジヨはきらりに弾き飛ばされてしまった。

父親を殴られて黙っている気にはなれず葵は父親の方に向かった。

「八重、そんなまさか。」

「八重さん？」

「違うよ、ボクだよ。」

「葵生きていたんですね。でもどうして?」

「いいじゃない、ただいま。」

「葵、驚いたわ。キレイになって。生きていたのね。」

ときらりはケムゾウを睨んだ。

「お前のような卑怯者は八つ裂きにしてやる。」

「葵、会津を守るのは大仕事よ。少しは私の苦勞もわかってほしいわ。」

「会津はボクの故郷だ、女王の座を渡してもらおうか?」

きらりに迫る葵。だがどちらも一歩もひかない。

「そうね、もともとはあんたが女王になるはずだったんだから。だけどね、承知しない奴

らがいる。あいつらよ、女王はこの私だと言っている。」

ときらりは忍者の方を指さした。しかし、摺たちは

「俺たちは違う、もうお前なんか女王じゃない。葵が次の女王よ。」

「さあ、どうする?きらり、分け渡すか戦うか?」

「ああ、もう暴力なんてもうこりごりよ、そのせいで身内を失う。そう思わない?葵。」

「そんな手にはのらないよ、過去は乗り越えた。」

「だけど、乗り越えられない奴が大勢いるではないか?」

「葵、なんの話をしているの?」

「ああってことはあの時の話はしていないのね。」

いいわよ、この機会だ。八重は誰のせいで誰が死んだのかみんなに教えるがいい!」

きらりが葵の周りを余裕そつに回る。

摺たちはきらりのこの余裕はなんだ?と不思議がっていた。責められているはずのきらりが、余裕そつなのは何?と。一方きらりはというと葵がまだ自分のせいで八重を殺したと思っているからあの時のことを思い出させれば私は永遠に会津の女王になるのよ。ときらりは葵のせいにしてケムゾウたち忍者を集めた。今度は葵が責められてしまった。

「ボクだ。」

するとジョーが

「うそですよ、うそだとみんなに言っんですよ。」

「本当なんだ。」

「みて、本人が認めた。悪党め!」

「ちがう、あれは違うんだ。」

「あんたがいなきや八重は死なずにすんだ。あんたのせいよ。それでも違うっていうの？」  
「いや・・・。」

「だったら殺したのはあんたよ。」

「違う、ボクが殺したんじゃない。」

「さあ、どうする？ 葵。だけでもう助けてくれる母親はいないのよ。そりゃそうよ、その母親はあんたが殺した！」

「葵。」

「さて、この光景どこかで見たような・・・。あれはどこだっけ？ あ、そうそうあんたの母親が死ぬ前に同じ格好をしていた。最後に私の秘密を教えてあげるわ。」ときらりは今度は葵を川流れにしようとしたとき、きらりは葵の耳にささやいた。

「わたしが八重を殺した・・・。」

その時葵が大好きな母親、八重が川に流される情景が蘇った。

「卑怯者！」

「待って、何をするのよ。」

「真実を言うんだ！」

「真実、もうみんなが知ってることよ。」

と葵はきらりの首を絞めた。言わなければもっとひどい目に合う気がしたのできらりは秘密を打ち明けた。

「わかったわ、言うわよ。私が殺した。」

「聞こえないぞ、もう一度言え！」

「あたしが八重を殺したのよ！」

とケムヅウ、きらりと葵、摂、ジョーの戦が始まった。

ニャンチャン、井田、青木、康弘も戦に加わった。そして葵対きらりの女の戦いが始まった。どっちとも譲らない女王の座の戦いだ。

「卑怯者。」

「葵、私が悪かった。頼む、助けて。」

「お前なんか生きている資格がない。」

と怒る葵に許しを乞うきらり。

「そんな、身内ですよ。忍者だ、真実の敵はあいつらよ。あいつらがたくらんだのよ。」

「誰がそんなこと信じる、お前の言っているすべてがウソだ。」

「私をどうするっていうの？ 年老いた叔母を殺すなんて出来ないでしょ？」

とわざと許しを乞うきらりに腹をたてる葵だがきらりの手には乗らないと決意してるかのように黙る。

「そっだ、出来ない。ボクはお前とは違う。」

そつだ、出来ない。今きらりを殺してしまえばきらりがやっていたことと同じだ。

「ありがとつ、なんて優しいんだ。このお礼はなんだつてする。あんたが言うことならどんなことでもきくわ。」

怒りを抑えてきらりの真似をする葵。

「行け、逃げるきらり。そして二度と戻るな。」

「わかった、そつしよう。」

ときらりは見逃さなかった。葵が油断していたことに。

なんと火の力を葵の目に目かけてなげたのだ。

「おおせのままに、女王様。」

もうそこにいたのは姪と叔母の関係を捨てた女の戦いだ。

どっちとも一步も下がらない。そしてきらりは葵の強さでとうとう崖下に落ちた。

ケムゾウ忍者たちを裏切ったことできらりは忍者の下敷きになってしまった。

そして会津にはきらりとケムゾウたちはいなくなった。葵は恋人の撮と父親ジョーに挨拶をした。

康紘に招かれて女王の座につく葵。もうそこにいたのは女王の座から逃げた葵ではない。会津やみんなを守る女王になったのだ。

やっとわかったよママ。ボクは勇敢で優しい女王八重の娘の葵だ。そして自分は自分ら

しくいようという命令を出した。そして会津は八重が治めていた時の様に。みんな笑顔になった。

支配者がいなくなった会津。女王になった葵は撮を夫として、王として迎えた。そして葵と撮の間に小さな命が。そう、葵と撮の間に娘が生まれたのだ。

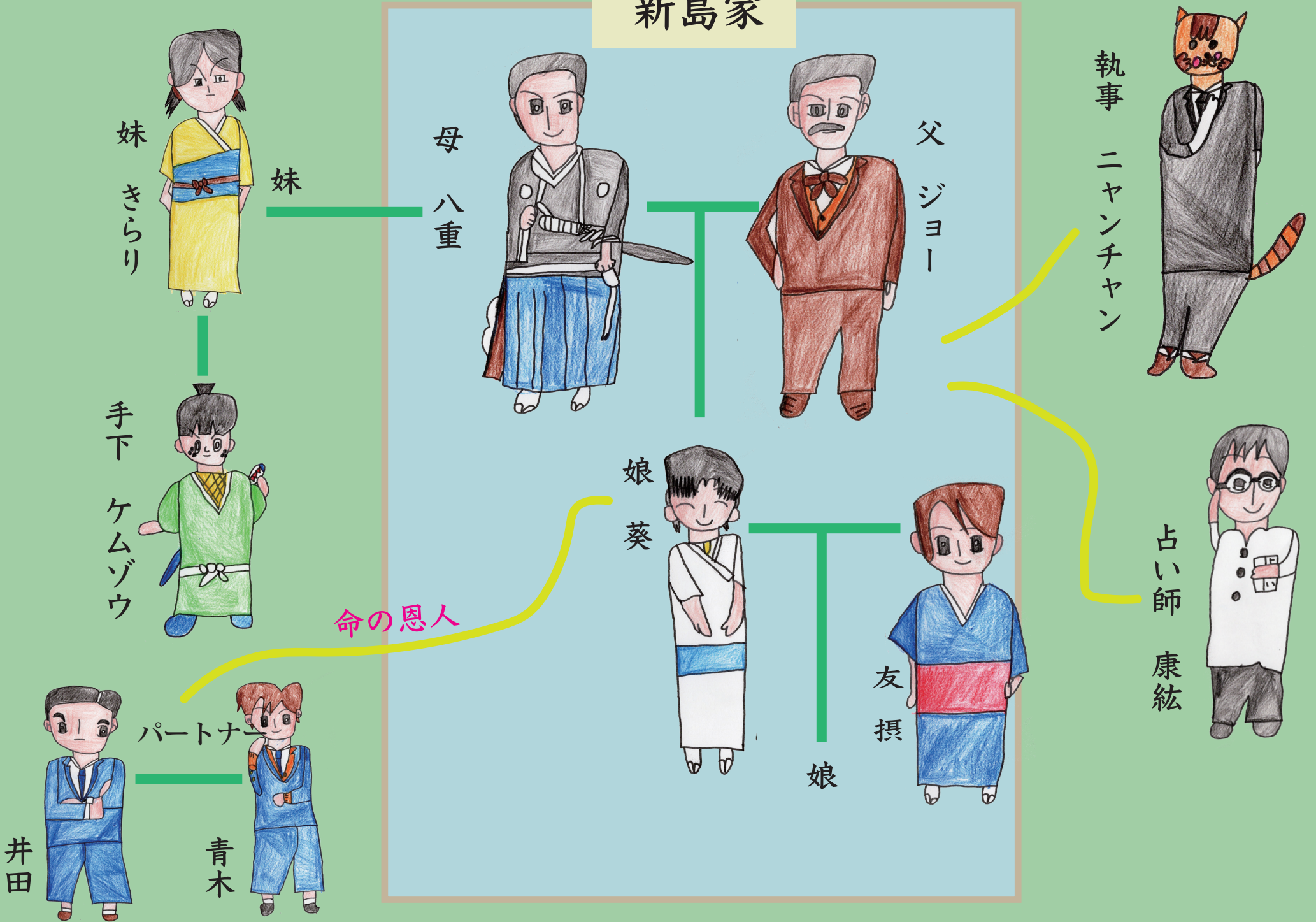
「康紘、その子をお披露目してくれ。あの時のボクのように。ボクの次の女王になる子のために。」

と葵は呟いた。

そして康紘は、葵と撮の娘を会津の町人にお披露目した。それは、女王の八重と王のジョーの間に生まれた葵のお披露目と同じ様だった。

まだ幼い娘。それは、会津の新しいハンサムクイーン誕生だ。

# 新島家



妹  
きらり

妹

母  
八重

父  
ジョー

執事  
ニヤンちゃん

手下  
ケムゾウ

娘  
葵

命の恩人

占い師  
康紘

パートナー

友撰

娘

井田

青木